

微苦笑俳句コレクション

江國滋選

●春

長閑アと口裂くるほど猫あくび
こやつ孫ちんぼこ直立して春ぞ
千万の俳句人口山笑ふ
癩立つるとき箒目利休の忌
春一番ありしと一人言ひ張れり
日脚伸ぶ励むにあらず怠けもせず
目借時きのふと同じものを食べ
春の夢女人あらはれ難きかな
白もくれん一糸まとわぬま現れぬ
春炬燵ドラマの嫁と比べ見る
春昼やロケの侍カレー食ひ
山笑ふ風笑ふわが誕生日
老いても嬉しバレンタインが来るは来るは
通夜葬儀通夜葬儀寒戻りけり
春の風邪移して愛の証と言ふ
風船やみんな中流家庭です
オムレツとタンポポの黄や日曜日
噫（ああ）と開けし埴輪の口に春の風
桜餅夫も買ひ来て余りけり
卒業歌あの先生が泣いてはる
冗談がこけつまろびつ卒業す
轉りに囲まれ歯痛耐へ切れず
あほらしや名札と違ふもの芽出づ
伸びるだけ伸びる寿命へ納税期
ンの字もソの字も同じ入学す
相撲ギヤル野球ギヤル蛙ぎやると鳴く
花冷のちがふ乳房に逢ひにゆく
春の闇百歩は五十歩とちがふ
卒業す最後の最後まで不良
春満月仲麻呂如何杜甫如何
春シヨールひらひら嘘をつきにけり
茎立やあの手この手の村起し

白石茶子（白石冬美）
鈴木鷹夫
永積貞子
木内怜子
右城暮石
清水基吉
横田昭子
藤田湘子
鎌倉佐弓
前田清治
早野広太郎
伊藤トキノ
尾村馬人
倉田春名
菊池純代
峠谷清広
長谷川瞳
小川匠太郎
本多サヨ子
江隅順子
山口裕司
北建夫
吉田愛子
有馬ひろこ
中野寿郎
星野石雀
真鍋呉夫
藤岡筑邨
小澤實
山田みづえ
黒崎かずこ
高萩篠生

○型がもつとも花見好きらしき
ぐつたりと遠足がバス降りて来る
落第を節目に稼業継ぐといふ
兄の倍世話を焼かせて卒業す
卒業の悪女より来る投げキッス
大乳房あたまは弱し四月馬鹿
こいつめが髭をたくはえ四月馬鹿
年寄りのチャンネル喧嘩万愚節
福耳のしかとささへし入学帽
桜散る並の世間が見えてくる
身延山無神論者は朝寝して
犬ふぐり昼の日なかの女人風呂
花粉症尼僧も人の子なりけり
恋猫曰く「わが輩はバカである」
焦がされてこれぞまことの目刺なる
雨読いや晴耕もいや芽吹く頃
受験票・鉛筆・消しゴム・守り札

●夏

紋白蝶セカンドベースにとまりけり
鯉よし酒よし前は太平洋
サングラスの視線と合ってしまひけり
坪老阡萬圓也の茂りかな
親不孝横町殊に明け易き
藤房にかがやき他人のにぎりめし
翻訳詩難解晦渋青林檎
花ざくろ胸のうすきを診られゐて
年甲斐もなきワイキキの赤水着
令嬢の犬緑陰に便催す
ひきがへるバベルバブルと鳴き合へり
珍しく柏の葉なり柏餅
ナイターの八回までは勝ちゐしを
衣更してくらがり坐りゐる
乱鶯や乳首の尖りゆく思ひ
香水やシャネルとタブーすれちがひ
ポケットに黒のネクタイ冷奴
孫三人トマト好く子と好かぬ子と

酒本八重
辻田克己
小林ふみ子
丸尾三鶏
小野宏文
土屋柚子湯
浜田白鳥湖
石山耶舟
鎌田絹子
守田椰子夫
篠原三郎
渡辺正夫
市川いと子
小菅三千里
林翔
大塚邑紅
蛭子雷児

永六丁目（永六輔）
高坂美和子
岩本淑
大野朱香
能村登四郎
佐藤琳子
星野石雀
小野淳子
柳川英一
茨木和生
澤木欣一
右城暮石
大島民郎
今井杏太郎
秦夕美
田辺レイ
西山誠
喜多てる子

登山電車将棋倒しに娘ら眠り
業平忌一目惚れとは美きことば
ところてん女らに暇多すぎる
六月や眠れよい子よ働け妻よ
炎天へ打って出るべく茶漬飯
ビール飲むために働くとは笑止
暑き故ものをきちんと並べをる
夏痩せて畳はかくも固きもの
すてこの親子に同じ癖いくつ
水着ではないといふだけロビーに居
喉痛し首痛し腰痛し梅雨
Bカップのブラジャーはずせ半夏生
男も馬鹿女も馬鹿の冷奴
掌中の水着から海絞り出す
教へ子はよきかなビール林立す
七月は脳を休めて水飲んで
六十のウエストポーチ巴里祭
挨拶はさておき汗を拭き給へ
ショートパンツがようてステテコがなんでやのん
亭主鬱女房躁の大暑かな
炎昼や消せばテレビは箱になる
炎天を行く食はむため生きむため
長寿番付の横綱草を刈る
夏痩せて骨の髄まで迷惑人
いとけなきふるちんの朝夏休み
夜濯ぎや男のにほひ浸しおく
女教師の男言葉や夏は来ぬ
梅漬けて死ぬこと忘れゐる老婆
泥鱈鍋「昔はもてた」話ばかり
おろおろと母がかしづく帰省の子
運転がめつぽふ上手アロハシャツ
真剣に生きてゐる汗かきにけり
一卓は勝利のビールらしきかな
油虫一撃したり日焼妻
冷房のための上着を持つて出る
甚平を着て今にして見ゆるもの

森玲子
原裕
多田薙石
瀬戸正洋
川崎展宏
前田清治
細見綾子
長谷川耿子
松下宏民
後藤比奈夫
高橋悦男
三池泉
佐藤和夫
大島雄作
森田峠
唐沢動火
山口卓
杉良介
小寺勇
草間時彦
伊藤たまき
遠藤若狭男
三尾知水
田仲了司
三橋敏雄
小桜美登里
上島清子
服部海童
塩田圓翁
村山秀雄
加藤菊代
本田保
吉田愛子
皆川盤水
西村睦子
能村登四郎

夏服を着よランプのジャック達
女には第七感あり水中花
まるで板糊の浴衣に腕通す
墨染の中のふぐりも暑からむ
わつと来てわつと帰りし花火の夜
袖口に鋭角の肘夏少女
蟻語とは手話かも昼の遊歩道
病歴に失恋とありアマリリス
ゆるやかに着てひとと逢ふ蛍の夜
炎天をゆく眼の玉をひとつ病み
万緑や俳句は詠まぬ天皇家
校長満悦洋裁学校汐干狩
死後といふ時間あるひは涼しきか
花柘榴少女の鉄棒臍見せて
「かくて夏果つ」と立腹帳に書いて寝る

●秋

乳房より重き柘榴と思ひけり
烏賊さいてその夜抱かれる女である
四万六千日孫に煙をぬりたくる
すでに秋風や尿（いばり）を吹き曲げて
八月の子供きれいなオシッコだ
原爆忌ダリの時計はひんまがり
あやまちはくりかへします秋の暮
雑巾のごはごは乾く終戦日
炊きあがる朝飯の贅今朝の秋
新涼や歯並びのよきハーモニカ
おじんにはおじんの流儀花茗荷
秋涼のきりりと巻きし岩田帯
突堤に鯊釣る個人個人なり
刻々とわが脳老ゆる鯛雲
どう見ても蝗の顔は馬づらよ
新秋や痩せてきりきり女性記者
新涼や歯を抜く女医の腋毛見て
暴落の株式相場台風来
天さらに高しダックスフントには
台風待つ声いきいきと予報官

有馬朗人
柴崎富子
戸田遊太郎
鈴木鷹夫
杉田さだ子
田中春生
浦井文江
森井美知代
桂信子
吉田汀史
荒巷樹
小沢変哲（小沢昭一）
黒崎治夫
宮脇白夜
井本農一

河野南海
竹村国子
鈴木石夫
伊丹三樹彦
佐藤琳子
本田保
三橋敏雄
原田清子
皆川盤水
青柳志解樹
草間時彦
浪野聡子
橋本美代子
柳生千枝子
木村たき子
藤本静子
富士衾去（富士真奈美）
浜田白鳥湖
吉岡弥寿子
片山由美子

紅葉狩りかわらけを投げ恋も投げ
灯親し少しも金にならぬ稿

楓千和
小路紫峽

葛の葉に股間ゆるびてゐたりしよ

桑原まさ子

天網の隙間だらけの鰯雲

吉原一暎

露草や清貧といふ負け惜しみ

芦澤芦水

燈下ことに親しみてをりヌード集

清水基吉

階下りしスカートに入る秋の風

金子洒音留

菊衣姫は菊師の為すままに

河野南畦

大股に秋は来にけり我も秋

中村苑子

ここよりほかにあるとこなくて夜長かな

生地みどり

けんがいの菊うぬぼれのできあがり

松澤昭

秋灯や稿一枚に辞書三たび

宮城白路

酔ふて寝てころりとさはやかに逝かれ

伊佐利子

鰯雲祝いのような葬儀終ゆ

松井国央

葬儀屋の片付けはやし秋の蟬

池田秀水

天高し嫁には嫁のライスカレー

磯辺義介

台風夜のカップセルホテルかな

小池てるを

かりがねや信じて渡る青信号

大里泰照

稲妻や女のなかに夜叉の棲む

久保田勝子

靴磨き靴見て古いぬ鰯雲

倉田春名

松茸飯三杯食べて更に食ぶ

楠節子

新刊書ほどの秋思といふべしや

片山由美子

菊食べて吾が六十の媚薬とす

萱場静子

豊秋や村にひとつの床屋さん

藤岡筑邨

整理するるとて散らかすや冬支度

千原草之

冬支度片づけすぎてしまひけり

宮崎恵美子

買って飲む水に銘柄文化の日

佐藤博美

使ひ捨てカメラで写す文化の日

三宅桂

●冬

重ね着て自惚れ鏡丸く拭く

大坪和子

スキー列車に乗り合せたるふしあはせ

松村武雄

花八ツ手男女と別の性欲しや

原子公平

雪降ると母いへば雪降りにけり

本多サヨ子

日向ぼこロダンの像に似てゐずや

森田峠

おいと呼べばはいとどこかで春隣

田中幸兵衛

山茶花や隣人としてわが子住む

石倉啓補

お犬様縞のセーター着て通る
吊橋は渡らぬ約束探梅行
捨てる神ひろふ神ことごとく留守
地球引っぱって大根抜きにけり
熊食へと押しつけがましからざるや
そのむかし恋の髪いま木の葉髪
結局は病気談義や冬の宿
セーターの錨の模様胸を逸れ
断られたりお一人の鍋ものは
大蕪を蹴とばす夫婦喧嘩かな
微笑みて風邪癒えたりと癌患者
だが秋田美人に逢へずきりたんぼ
焼芋のやうな顔して焼芋屋
着ぶくれて強情・頑固・石頭
がみがみとぶつぶつ共に着ぶくれて
居酒屋のアベックのセーターだぶだぶ
人参も人参好きな人も嫌(いや)
何かせねばの日和勤労感謝の日
一葉忌むかし井戸水温かりし
またおでんかと言ひながら二階より
短日の妻気短くなって来し
右ブーツ左ブーツにもたれをり
芭蕉似は弱きはらわた冬紅葉
世の中と少しづつずれ葱を噛む
炬燵寝や口中入歯ばかりなり
宝くじ売場ミンクのコート着て
息白し大柄にしてオペラ歌手
さう言へばこけしに耳のない寒さ
女番長よき妻となり軒氷柱
つんとして豹の毛皮の中にある
玉子酒くすり嫌ひの名医にて
ドクターを信じきれずにゐて寒し
新聞は広告ぶくれ十二月
羽子板の玉三郎とすれ違ふ
白障子白内障と読み違ふ
家といふ箱に灯の満ちクリスマス

さくたやすい
村上幸子
井野場靖
成瀬櫻桃子
茨木和生
鈴木真砂女
植村霞煙
宇田喜代子
岩下四十雀
金子兜太
赤坂銀慶
鷹羽狩行
藤岡筑邨
西宮舞
彦根伊波穂
瀬戸正洋
武藤たみ
宮沢けい
成瀬櫻桃子
吉田欽一
今田淑子
辻桃子
佐藤鬼房
山藤三魔
北野民夫
泉頌子
鎌田絹子
久保枝月
大木あまり
泉田秋硯
水原春郎
保坂リエ
青木美佐子
三村純也
田川飛旅子
松下宏民

一円にひまどつてゐて師走人
薄氷を踏み行く若さありにけり
「あるもので食べて」と炬燵の走り書
火の気なき炬燵の上の置き手紙
ねんごろに編みしマフラーしてくれず
大寒や何でも熱きものを炊け
歳時記に異議あり甘酒は絶対冬
買物は嫌い着換えること寒し
湯たんぽを蹴落として子は夜も育つ
読み捨てのぼろぼろ漫画暖房車
若ぶらず爺ぶらずに春を待つ
靴底にホームのいぼいぼ雪催ひ
着ぶくれてなにをするにもどっこいしよ
美醜際立つ女生徒の日向ぼこ
どっちみち地獄行なり日向ぼこ

●新年

妙齢の春着音してにほひして
ひさかたのあさきゆめみむひめはじめ
二日はやメスを執りたし外科医われ
お書き初め気負はず書けと言はれても
家のローン車のローン去年今年
元旦に好色の夢給はりぬ
初湯殿卒寿のふぐり伸ばしけり
三ヶ日まだ悪しきこと何もせず
末の兎に目くばせをして読む歌留多
読み初めのいきなり一人殺されぬ
人生の第何章の初暦
松の内人を訪ねず人も来ず

田畑美穂子
山岸眞
村沢東月
岸田眠女
飯田あさ江
有吉桜雲
小寺勇
中村美登里
今瀬剛一
藤井亘
佐塚半三
井本農一
佐々木踏青子
楠節子
檜紀代

森澄雄
鷹羽狩行
若林大朔
三島敏恵
秋山広巳
浅野キヨ子
阿波野青畝
村松ひろし
吉田花宰相
木戸渥子
塙告冬
田川飛旅子